耕地の形状に関する2つの問題

谷 岡 武 雄*

Two Problems on the Form and Size of the Patch in the Japanese Arable Land

by

Takeo TANIOKA

(Résumé)

The form and size of the patch may be investigated from these two standpoints, agricultural geography and settlement. The writer elucidated these problems by means of many Japanese archives, ancient literary works and cadastral maps.

As for the arable land, agricultural geography deals with several conditions requisite to the patch.

1) Conditions of Agricultural Management: In Japan, the average size of a patch is about 0.15 acres and each farmer with his family manages 16 patches. But this number changes according to the regions. In Nara prefecture, where the most ancient culture of our country has been inherited, a patch has the average area of 0.13 acres for the paddy field and 0.06 acres for the other. Generally speaking, on the plain where the paddy field is managed on a larger scale, the patch is large but on the mountain small. But this proportion can't be applied to the other field, the variation of whose area is greater.

2) Conditions of Labour and Technique.: The fundamental size of a patch in the Japanese rice-field is 1 *tan* (0.295 acres) and is based on the *Jori*-system. It is said that this size depends on the cultivating power of an adult man a day. But this is by no means clear. A patch has a narrow and long rectangular form, owing partly to the introduction of the plough driven by cattle or horse. The most important factor in the older times must, however, have been irrigation for the paddy field. It goes without saying that the size and form vary with kinds of crops.

3) Conditions of Land Form. : A patch varies with such a land form as islands, coastal plains, basins, fans, plateaus etc. The writer verified this fact consulting many ancient archives and literary works.

4) Fixation of Patch and Equilibrium among its Factors. : Generally speaking, the patch is determined by natural and cultural conditions, and can maintain the initial form and size comparatively for a long time. There is some equilibrium among many of its factors. But the equilibrium is broken sometimes by soil erosion or by technical, agricultural and social revolutions. According to the historical evidences in Japan, however, there had not been so great a change of the patch as the European enclosure since the Taika Reformation up to the Meiji Restoration. And may this not account in some way for the retardation of Japanese agriculture and society?

By the settlement geography of field can be made the researches about the correspondence or correlation between the forms of settlement and arable land. In Europe, the aggregated villages in the country have the field of narrow and long strip, while the dispersed farms block-field. The contrast between these two types, therefore, is very clear. And before the differentiation of them there was „*esch*“ or „*gagnerie*“ (cooperative field) in some parts of the villages' field. In addition to these facts, the two-field system presented a proper form of their own. *Strassendorf* in slave land had also a special form. And thus the European villages and farms show the correspondence between the forms of settlement and field.

* 立命館大学文学部 地理雑誌 Vol. 61, No. 2 (684) 1952

On the contrary, this relation is not so clear in Japan. It may generally be observed that in the field of the *Jori*-system there is the lattice-form of village. But in the Sanuki plain with the *Jori*-system of northern Shikoku the settlement is dispersed. And the reclaimed coastal plain of south-western Japan has the dispersed farm and paddy field divided in a regular manner. The linear village in Musashino takes such a form as European *Waldhufendorf*.

Such a vague or non-correspondance state has been caused by the cultivation of the rice-plant, which requires irrigation. This is an important character of Japanese field. Now, the field in the course of many ages has come to be divided into small patches, and the proprietary relation is complicated. Therefore it is seriously desired that agricultural management should be rationalized more than before. The readjustment of arable land all over rural Japan should be made as it is the most important work.

は し が き

耕地の形状は、農業地理学、集落地理学、地誌の研究上、農村集落とならぶ主要な課題であって、すでに辻村太郎博士や村田貞蔵氏によって研究業績が発表されている。筆者はここに地域性究明の1つの手がかりとして、歴史地理学的な立場から論ずることとする。1) 2) 3)。

1. 自然条件と農業経済条件——農業地理的側面の考察

人間の労働によって自然が生産的に占有され、自然への土地経済の適応の結果として形成された耕地の形状は、あるいは対立拮抗し、あるいは均衡を保つ所の自然条件と、経営乃至技術的条件とによってまず規定されている。農業地理学の対象たりうるのは耕地のこうした面であって、それには間接的なものと直接的なものとが考えられる。まず前者より考察しよう。

1. 耕地の大きさと経営条件 農家の経営規模の大小並びに経営形態は、耕地の形状を規定する条件たりうるであろうか。日本農業が園耕的で、過労労働と過多施肥による土地の生産性の増加を図る零細経営を中心とするものである以上、耕地1区劃の大きさは、極めて小さいことが予想される。1934年における全国有租地580万町余は9400万筆に分たれ、1筆当りの面積は6畝余にすぎず、而も1経営当り平均16筆に分割されている⁴⁾。だがかかる概括によってはそれに作用する条件が明らかでない故、今は主として西南日本の中でも、かつて最も先進的であった奈良県の場合につき考察してみたい。

同県の1943年2月現在の耕地1筆当り平均面積は、水田0.53段、畑地0.26段である。まず水田についてみるに、その1区劃の大きさは畑地のその2倍余であり、且つ大和盆地では大で、周辺の山地では小となっている。その最大は盆地の中央やや北寄りにある漆上郡平和村の1.18段、最小は吉野山地の小川村の0.18段であって、両者は上の傾向をよく代表している。所で注目すべきは、

水田区劃の大なる所はまた農家1戸当水田経営面積も大であり、その上、耕地率も高いという事実である。例えば平和村では1戸当水田経営面積が9.5段となって県内の最高を示し、その南隣の活道村は7.5段でこれについている。耕地率はそれぞれ80%、77%で、県平均の10%に比し極めて高い。かくて平地、比較的大なる水田区劃、高率の土地利用、米作中心の農業経営の4者間に密接な相互関係を見出しうるのである。これに反し、山地の水田はいずれも区劃は小さいが、南の吉野山地と北の笠置高原、生駒・葛城両山脈とでは事情が異り、前者では水田経営が主とならず、後者では傾斜地にして猶米作に固執することと関係が深い⁵⁾。

水田に比べると畑地1区劃の大きさの分布は、明瞭な傾向を持たない。これは水田の形状よりも畑地の方が、自然条件への適応性が大なることを意味する。そこで地形別にこれを見れば、まず第1に、盆地の中央部では、畑地が少なれば区劃もまた小である⁶⁾。かかる所では畑地は、殆んど自給用菜園としての意味しか持っていないのである。だが水田1筆の大きさと畑地のそれとの相関係数は0.137で、有意ではない。第2に山麓では畑地もやや大きく区劃されて、果樹や茶が栽培され、商業的な経営が若干行われる。第3に吉野郡以北の山地では、さほど高峻でないため大きい畑地の区劃があらわれ、畑作の占める率が平地より大となる。最後に河谷が深く開析している吉野山地では、急傾斜のため水田同様に大区劃を行い得ないが、畑作経営面積は水田のそれより大きく、且つ全体として農業は振わない。

以上より、耕地の形状と経営規模との関係については、「経営面積が大きいほど1区劃の面積は大となる」こと、また経営形態との関係については、「水田は平地では区劃大で、傾斜地ほど小となり、これに対して畑地は偏差が大きい」とい得よう。だがこれらの関係は間接的であり、実際には他の諸条件に強く規定されて、様々な形状をとった耕地があらわれるのである⁸⁾。

2. 労働並びに技術的条件 耕地の形状を直接規定するものは、耕作する側の労働的、技術的条件の如何である。だがこれについては農業土壌学にて種々研究されているので、ここでは歴史地理的に重要な側面の考察に限りたい。そこでまず問題となるのは農民の労働量との関係である。わが国の土地制の基本となった条里制において、その単位区劃は1段（現在の1段2畝）の地積をもつが、これは壮丁1人1日の耕耘可能面積と関係あるものと見なされている⁹⁾。これは甚だ示唆に富む見解であるが、労働の集約性即ち単位面積当り労働の投下量が時代によって異なる故、現在よりの簡単な類推は危険を伴い易い。例えば、弘仁14年（823）の太宰府管内公営田に関する太政官奏に基いた沢田吾一氏の算定では、水田1段に付、単功15日（300歩1段として12.5人¹¹⁾）となっており、これを現在の全国平均である20人に比して、たとえ牛馬耕としても、かなり粗放的であったことが知られるのである。更に1日の労働量そのものも、時代により、地域により異っている。例えば「塩尻48」¹²⁾に「勢江以西の農夫水田を耕には、必犁を以てす。我尾州の民は皆鋤を以てする。されば牛耕は1人半日の功大概田1段をかせすべし、鋤を以てするもの3人に当れる鋤云々」とあって、以上とは異った近世の状態が述べられている。その上、計画的な土地区劃に際し、どの程度まで標準労働量の如きが意識されていたかについても問題がある。これらの点に関しては今後の研究にまたねばならない。

第2に問題となるのは、耕作手段即ち農耕具との関係である。ヨーロッパ北部の3圃制村落における細長い整然たる地条と、南部にみる4辺形の不規則なものとの対照は、犁がcharrueかaraireかの相違に因るものとされている¹³⁾。わが国の水田は、地積経済よりみて適当な正方形でなく、殆んど長方形をとっているが、これは牛馬耕の場合、犁の廻転度数を大ならしめない為である。それもこの場合、長さは15間以上、80間以内であり、且つ面積1.2段の所では、短辺は長辺の $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{3}$ が適当とされる¹⁴⁾。条里地割における長地・半折両形態の出現の先後問題は、しばしば論争の繰返される所であるが、長地型と牛馬耕との対応関係はほぼ認められ得るであろう¹⁵⁾。だがこの際、牛馬耕では小面積程長短2辺の差が甚しい長方形がよく、大面積ではその差をつける必要がないという点に注意しなければならない。更にまた半折型が牛馬耕に必ずしも不適当でない点も、上の問題を一層複雑にしている。現在の耕地整理では1区劃1段が多いが¹⁶⁾、それも30間×10間となって、長地型より益々遠ざかっているのである。

第3に作物の種類如何との関係が問題となる。耕地を

田と畑とに大きく分けて考察すると、前述の如く、畑の区劃は大小様々で、形も不整の場合が多い。地形が起伏に富む程、かかる傾向が強くなり、例えば後述の伊予弓削島荘についてみるに、畑は水田よりはるかに多様な形状をとっていることが知られる。これとは時代が異なるが、続地方落穂集（巻5、棒立指南之事）にも「山畑刈生には如此不形成大畑多し」とか「大に長畑有べし」とかが図と共に記され、畑の区劃は過去においても現在と同様な傾向を持っていたものと考えられるのである。これに反し、水田、特に平地のそれは種々なる理由から整然たる長方形をとることは、今更申すまでもない所である。中世の田地売券において、「東圭何段」「何段西一」「北繩本何段目」等記されているのは、みなこの様な長方形である。ここに興味が深いのは、低地で畑が得られぬ所にしばしば見られる、田畑が入交った特有の形状である。それは大蔵永常の「綿圃要務」（天保4年）に半田あるいは掻揚田とあるもので、河内・山城・遠江などかつて綿作が行われた河川流域に分布している。第1図は山城盆地の旧巨

第1図 条地割に基く掻揚田
（山城国久世郡御牧村字宇活道）

棕池南岸附近のもので、田畑合して1区劃1段の大きさをもつのは、条里地割に規定されたためである。河内平野でもこの形態が多いが、更に低湿地では、中央が細長い水田で、3方を広幅の溝渠で取囲まれた形態となる。

第4に、既に触れた如く、水田の場合は、灌漑がそれを区劃する最大の規定因子となる。自然灌漑は別として、他より用水路を引くとすれば、水量・流速・注入口の大きさ等の制限により、灌漑面積はおのずから一定の限界を持たねばならない。かくて常時灌漑で1町歩以内、間断的灌漑で5段歩以内の大きさが適当とされている。更に1区劃は全く平坦であるよりは、灌排水管理の難易から1/100～1/1000の勾配を持つ方が理想的である。

以上に挙げた諸条件は、いずれか1つが決定的というのではなく、それらが互に対立拮抗し合いつゝ、抵抗が最も少く均衡を得た所で、1区劃の大きさが定まるものである。だがその安定したものは決して一挙に獲得し得

るわけではない。この意味においても耕地の形状は歴史的といえるであろう。

3. 地形的条件 先に奈良県の場合にみた如く、自然特に地形は、耕地の形状を規定する極めて重要な条件となっている。このことは史料的にも明らかになしうるのであって、いまこの点について東寺百合文書の中よりほぼ同時代に属する文書を選んで検討しよう。地形的環境としては、瀬戸内島嶼、裏日本海岸平野、丹波高原の山間小盆地を取上げ、かりに伊予弓削島庄¹⁷⁾、若狭中手西郷里¹⁸⁾、丹波大山庄¹⁹⁾をしてそれぞれを代表せしめてみた。これらについての文書より面積階級別耕地区劃の頻度を図示すれば、第2図の如くである。これによれば、

第2図 中世莊園における耕地区劃の大きさ

小島嶼や山間盆地の区劃は小さいものが多く、海岸平野では広い区劃が多数あらわれていることが知られる。更に条里制施行地域では1段劃が最も多く、且つその倍数あるいは $\frac{1}{2}$ 区劃の頻度が大きなるは、条里制が強く生きているからである。若狭中手西郷里での傾向は、同国太良庄に関する文書²⁰⁾についてもいい得るし、また瀬戸内広島湾岸の安芸新勅旨田²¹⁾にても同様な傾向を示している。山城盆地は海岸平野と山間盆地の中間といえべく、例えば上野庄では、²²⁾1段以上に亘る水田が少い。またこれより時代は遡るが、榮山寺文書²³⁾を検するに、紀ノ川上流に位置する大和国宇智郡では、「乍」(作)と記されたものは、たとえ区劃が大きくても、殆んど段以下の端数をもっているのである。

以上は弓削島や紀ノ川流域を除き、比較的平坦な地形の場合であるが、傾斜地を水田に開くには、勾配が僅かでも階段工を施さねばならない。南方諸地域の階段耕作は大きかりのものとして、また四国吉野川の千枚田はその極端な例として著名である。かかる棚田(懸田、階田)²⁴⁾は灌漑の理由から等高線に沿って連続し、その外側は凸状で扇形を呈している場合が多い。これが山田で数多く

累積すれば脇棚田²⁵⁾とも呼ばれる。水田に比べると畑地は、かなり大きい傾斜でも山成りに作ることができる。だがこれも傾斜が 25° 以上になれば、必ず階段状(即ち段々畑、棚畑)にしなければならない。ヨーロッパのRideauxに就いては既にL. Aufrèreの研究があり、それも自然に生じたものではなく、人工的で従って歴史的であることが明らかにされた²⁶⁾。日本の場合についても能、吉崎両氏の広汎な研究があらわれている²⁷⁾。然し乍ら目下の所、その歴史は遺憾乍ら明らかではないのである。

4. 形状の固定と破壊 上述の諸条件が、均衡した耕地の形状をその後も永く保つものは、畦畔・道路並びに溝渠である。所領の境界に地境炭を埋め、あるいは傍示石を設けたことは既に報告したが²⁸⁾、これらが直ちに耕地の形状に関係するものではない。「際目」というのも同様である。畦(阿・久呂・畔・鳴・阿世・圭)とは「田地自他の境界」²⁹⁾をなすもので、且つは灌漑された水の流出を防ぎ、時には通路若しくは稲の乾場ともなる。条里制においては畦畔が直交する故に阡陌³⁰⁾であり、それはまた子午畔、卯酉畔とも呼ばれた³¹⁾。ところでこの長方形の地片が正しく東西・南北方向をとるのは、大和・山城・河内等の水田に多いが、その他の地方では地形に随って種々である³²⁾。

さて畦畔は実際に形状を固定せしめる役割を果たしたのだろうか。成形図説(巻2 農事)に「畦ハおのれおのれが田の畦ゆる獲田の後ハ切崩し置て来春再度打起の時まで水を閉置なり」とある。だがこれは畦と畝とを混同したものであって、大祓祝詞にも「畔枚、溝埋」は天津罪と見なしている故、畦畔の変更は容易ではなかったであろう。それを永く維持するには、植物を植えるのが都合がよい。地方落穂集(巻7、田畑境植物之事)に「田の境には、しやが杜若の類よし、水につよし、また切かきたる方へふへる草也、よつて境を切込事成難し、畑の境にはうづぎいばたの木類吉し、手房根深く土へ入物なり」とあり、草木で畦を固めることをすすめている。石垣は階段耕作の場合に用いられて、同様な機能を示し、また畿内の製茶地域では畦畔の茶樹が、散在茶園として統計にあらわれている。現在、水田の畦畔木は、丹波の龜岡盆地と近江の湖北平野をつなぐ線以北にその分布が限られているようであるが、過去にはかなり広範に亘っていたものではなからうか。山城盆地では木津川左岸にごく1部分残存している。これはもちろん稲架となすものではあるが、自ら耕地の整然たる形状を保つに役立ったのである。畦畔木の起源は明瞭でないが、承和8年9月2日(841)の太政官符「応設乾稻器車」³³⁾よりみて、恐らくこの時代以後漸次諸国にひろがり、現在では周辺地域に残存することになったのではなからうか。

自然の営力が強大に過ぎ、あるいは人間が営みを怠れば、直ちに相対的な均衡は破壊を来して、耕地は破壊される。不安定で人力を多く費やさねばならぬ所ほど、それは大きく現われる。実際、瀬戸内の島々や伊予の海岸をめぐって、あの見事に発達した段々畑の甚しい土壌侵蝕に驚かされるのである。それは突発的な災害によるものもあれば、徐々に進行する場合もある。裸地化された砂上や火山灰地の侵蝕、あるいは常時灌水される水田での注水口附近での土地の高まり³⁴⁾は後者の例である。こうした自然の働きに対し、農民は種々なる形で対抗していく。山城盆地の山麓では、村内にたいてい石垣積み専門の石工がおり、農民はこれに依頼して定期的に田畑の石垣を修理している。また全国至る所にみられる道普請、堰さへ等は、共同体が集団的になす対応策であろう。ところで1度破壊された畦畔も、大抵の場合元通りの形状に復旧される。これは土地所有関係に規制されているためでもあろうが、こうした所に強く現在に生きている歴史的な力が感ぜられるのである。

II. 村落形態との対応——集落 地理的側面の考察

一定のタイプに属する村落形態が、多くの場合、特定の耕地割をとるという事実は、集落地理学にとって甚だ興味の深い問題である。それは村落が農民社会の地理的投影であり、耕地が農民経済の表現であると見なされる限り、一定の時代の村落形態と耕地の形状との対応関係は、その時代の農民の社会と経済との相互規定関係を示すものと考えられるからである。従って前者の対応関係から後者の関係が推測され、あるいは後者より前者を説明することも可能である。このことは特定の時代といういわば横断的な相において見られると共に、それらの歴史的な発展の相においても追及せられる。ただこの場合、具象化された有形的な景観は、無形的な社会・経済の進化に即応せず、慣性的な効果が大で、多少とも遅延反応に似た現象を呈するという点に注意が払われねばならない。以下この対応関係が最も鮮やかなヨーロッパの場合をまず考察し、而る後、日本の場合におよぼう。

1. ヨーロッパの場合 ヨーロッパにおける村落の形態と耕地の形状との対応関係は、A. Meitzen 以来、多くの学者により研究されて来た所で、就中耕地が細長い地条に分たれた *Haufendorf*、*Marschhufendorf*、*Waldhufendorf* 等の *l'habitat aggloméré* と、ブロック耕地をとる *l'habitat dispersé* との対照は鮮やかである。然らば最初から、かかるコントラストが存在していたものだろうか。集散両集落形態の先後問題、私有・共有両制度の問題、人種との関係などについて、いまこ

こで詳論する積りはないが、O. Schlüter によれば、古ゲルマンの集落形態は集村ならば相互にひどく離れていたろうし、それが接近しておれば大へん小さい *Einzelhof* より成っていただろう。むしろ *Dorf* と *Hof* とは最初から並存していたもので、その分布を決定したのは地形的差違に外ならないとなしている³⁵⁾。F. Steinbach も同様に並存説をとり、それらが時の経つにつれ、鋭い地方的分化を示すようになったと述べている³⁶⁾。厳密な意味で *Gewannndorf* が普及したのはメロヴィンガー末期よりカロリinger期にかけての封建体制に呼応した現象であり、他方 *Einzelhof* の盛行は約1世紀遅れて8・9世紀ごろのことである。然らばそれ以前は如何。R. Martiny の *Westfalen* に関する研究によれば、山麓の最古の定住は10戸内外の小村形態をとり、その周囲には菜園、小耕地更に „*Esch*“ と呼ばれる数100米平方の細長い地条割の共同農地が展開していた。即ち *Esch-tlur* を持つ *Esch-dorf* であったという³⁷⁾。この *Esch* と類縁関係をもつものは、ブルゴーニュの *Couture*、フランクの *akker*、更にロアール下流地方の *gagneries* (*gagniers*) である。この *gagneries* は種々なる開墾期に成立し得るとしても、比較的肥沃な土地を占め、囲い地の *bocage* と開放耕地の *plain* との景観対比が行われる以前の時代にその起源をもつもので、かかる耕地には小村 *Hameau* が対応している³⁸⁾。かくて集散両形態の分化以前にも、村落と耕地の対応関係が認められるのである。以上の如き村落—耕地景観の進化は、経済の発展にいかに応じたものだろうか。R. Gradmannが、先史ゲルマンの経済形態が *Wilde Feldgraswirtschaft* であったことを、彼の *Steppen-Heide* 説に援用する努力は³⁹⁾ 認めらるべきである。かかる幼稚な段階から漸次発展して、8世紀ごろには圃農法が導入され⁴⁰⁾、穀物生産を主とする *Gewannndorf* と牧羊による羊毛生産を目指す *Einzelhof* とが、明瞭な分化を示して来たのである。近世に至って3圃制が捨てられ、商業的農業が盛行するに従い村落も耕地も複雑化したが、特に前者の場合古い基本形が残存しているのは、形態の側の遅延的対応のためであろう。

上にみた中・西欧に対し、東欧の場合は如何であろうか。H. Wilhelmy によれば、マラヴ集落は元来 *Zadruga* 的な *Einzelhof* であるから、それが発展して細胞分裂した結果は、ゲルマンの *Gewannndorf* に似ているが、それと本質的に異った村落—耕地形態をとらざるを得ない⁴¹⁾。後に細分された耕地は、錯圃的ではなく、比較的まとまって所有されており、形状もブロック的な色彩をとどめている。*Blockgewann* ともしうべき村落と耕地である。かくてここにも両者の対応関係がみられるのであ

る。更にまた集散両形態の中間に位する Weiler についてはどうであろうか。R. Gradmann は Württemberg のものについて、かかる小集落形態が不規則な耕地割を持っていることに注意し、中世早期の開墾によるものとなっている⁴²⁾。而してそれは一般にグルントヘル的な性格をもつが、Meitzen のいう如くすべての Weiler が荘園領主起源なのではなく、完全な自由農民によって作られたものもあることを指摘している。従ってここでは村落と耕地の対応関係は認められても、社会経済との連関は明らかではない。最後に、ミディにおける 2 圃制村落の場合は、最も対応関係の不明瞭なものである。その特色については別の機会に論述したが⁴³⁾、ここに再言すれば、その村落形態は集村に属するが、耕地の形状は Gewann-dorf 的な地条をなさず不規則である。だが牧地をもつ散村の如く囲われてはいない。これは樹木栽培、あるいは広くいって地中海的景観との関連において考察するべきであろう。

2. 日本の場合 以上によりヨーロッパの集落と耕地とは、若干の例外を除きその成立当時あるいはその後の変化の場合も、常に相互連関的であり、そこに地域性と一定の歴史時代の社会経済状態とが反映されていることを概括的に示し得たが、日本の場合は如何であろうか。以下、主として歴史時代がやや明瞭な計画的地割について考察しよう。

まず時代の新しいものよりみるに、北海道の疎居の計画的村落——植民地割——大農的経営と西南日本干拓地の疎居の計画的列状村落——干拓地割——先進的水田経営が共に近代社会を背景として成立し、武蔵野の列状村落——林障村的地条割——畑地経営や西南日本干拓地のやや密居の列状村落——干拓地割——水田経営が純粋封建体制の下に形成されたことは明らかである。ところでこの場合、村落と耕地との形態上の対応が、水田経営では畑作における程明瞭にあらわれないことに、まず注意する必要がある。このことは小異を捨てると、河川流域、潟湖、内陸湖の干拓についてもいえる。更に稲作が基調であった日本では、かかる不明確な関係が畑地経営の場合にまで影響し、扇状地、台地あるいは山地の開墾に関しても耕地割と集落形態との間に、1 義的な対応関係を示すとはいえない。

いうまでもなく歴史時代における日本、特に西南先進地域の村落と耕地との形態を規制したものは条里制であって、その村落形態は格子状路村 Citter Wegedorf とし、それに対応する耕地は、1 段（現在の 1 段 2 畝）を単位とした長方形区劃の規則正しい配列として特色づけうる。然もそれが水田経営の基盤として今日なお強く生残しているのである⁴⁴⁾。このような土地占居形態のもつ歴

史的意義については、筆者の他の論稿にゆずり⁴⁵⁾、ここではそれが、古代社会のデスポットが漸次成長強力化していく過程に応じてあらわれたもので、これが大化に至り頂点に達したということ指摘するにとどめる。従ってこれのみから、古代の共同体的な社会構造を推定するのは困難であろう。

ところで、かかる対応関係において最も説明が困難なのは、散村地域でしかも条里制をとる讃岐平野の場合である。日本の散村は、土地保有関係において、自己の住居附近に耕作地をまとめようとする傾向をもち、このことが経営の合理化を促進させる契機となり⁴⁶⁾、あるいはまた社会生活においても、集村とは若干異ったものをみる⁴⁷⁾、その相違はヨーロッパにおける程大ではない。耕地の形状も Enclosure によるものほど不整形でもなく、条里制によるものほど規則的でもなく、といって全く錯圃形態を捨ててはいない。ヨーロッパ、日本両地における散村の性格のちがいは、結局の所、前者では牧畜のもつ役割、農業との結合関係の如何が、集・散両形態の分化対立となってあらわれるに對し、後者、これを広くいってアジアモンスーン地域では、稲作が村落の経済活動の中心であり、これは灌漑を必須の要件とし、灌漑には必ず一定の大きさの区劃と排水水路を伴うということ、即ち水田耕作なる農業経済的条件が、他のいずれの条件にも勝って強く作用する故、集村にせよ、散村にせよ類似の耕地の形状をとらざるを得ないという事情に基いている。讃岐の散村は寺田貞次氏によれば、A. Demangeon の「2 次的分散」のタイプに属する様であるが⁴⁸⁾、果して然らば、耕地の形状が変化しないに拘わらず、何故村落形態のみが変化したか。あるいは何故分散しなければならなかったか。これが今後の散村研究の重要な課題の 1 つとなるであろう。ここでは単に問題提起にとどめておきたい。

かかる村落——耕地の非対応あるいはゆるい対応関係は、中世の豪族屋敷村についても同様にみられる。更にまた中世——近世の出屋敷、出垣内の如き分村も、旧来の耕地の形状を守るのみであった。あるいは条坊の施された廃都でも、宅地跡の古い形状の水田を経営して何の不都合も起らなかった。かかるゆるい対応関係を日本の農民社会が許すということは、村落——耕地の側では集約的に労力が投入された結果、容易にその形状を変更し難く、社会の変化に対し甚しい遅延反応を示すということに、農民の社会・経済の側では、その遅々たる発展若しくは停滞性に負っている。それ故にこそ、13 世紀も以前の古い村落——耕地形態が、今日なお残り且つ生きているのである。

3. 耕地の細分化と伝統の匡執 村落と耕地を媒介するものは、土地の所有（及び領有保有）関係である。ところ

で Enclosure の如き大きい耕地の変革を行い得なかったわが国では、耕地の形状の変化は区劃の細分——合併という軌道でのみ行われ、それに土地所有の錯雑化——一円化が対応する。そして生産力の発展、新耕地の獲得が遅々として進まない限り、細分化と錯雑化の傾向がより強い。だが古来の耕地の形状が合理的な経営を許す限り、これらいずれの場合にも、伝統の固執性が、新しい変化に強く抵抗するのである。

細分化といえば、まず中世が、それも大規模に開拓の進められた初期荘園ではなく、開墾が停滞的となり荘園の整備期に入った延喜・天慶以後が特に問題となる。条里地割における1段の下級単位である大・半・小があらわれてくるのもほぼこの頃で⁴⁹⁾、鎌倉時代に入ると一層盛んに用いられている。前述の伊予弓削島庄は、長寛2年(1164)頃「……狭少之地也」云作田塩浜、只二町余、云田堵住人、僅十余人⁵⁰⁾の状態であったが、文治4年(1188)には水田が3町3段半に増加し⁵¹⁾、桑も栽培されている⁵²⁾。この頃の土地区劃は大雑把であったようだが、乾元2年(1303)の領家・地頭代の下地中分⁵³⁾を経て、正和2年(1313)頃になると、水田1町7段半30歩、畑地11町8段320歩が、各上位領有者の下、大名(5人)、小名(6人)、半名(3人)、三分一(2人)、非名(3人)、公文給除(3人)に所有され、耕地が以前とはかなり細分されていることが知られる⁵⁴⁾。この場合、富裕名主の所有地ほど比較的大区劃であることは興味が深い。更にまた別の機会に報告した如く、領主直営の佃では、すぐれた耕作手段に対応して長地型が永く保持されたことも注目されよう⁵⁵⁾。下地中分に限らず、一般に耕作によって間接的な土地の領有関係が、耕地の細分化傾向を助長していることは明らかで、例えば伊勢国飯野・多気両郡では、寺領が公田に侵入した結果、両者が同一の坪内に入乱れている場合の方が、そうでない坪よりも端数のある水田がかなり多いのである⁵⁶⁾。

鎌倉時代に開発が進んだ関東はともかくとして、西南日本では室町時代に入ってもこの傾向は存続している。例えば前述の丹波大山荘については応安4年より63年後の永享9年(1437)の文書をみれば、段以下の小区劃の耕地が増加していることが知られる⁵⁷⁾。この事は安芸新勘旨田について、弘長3年の文書と77年後の暦応3年(1340)のものとは比較してもいい得、また平地に限らず山村の場合も同様である⁵⁸⁾。

以上のような中世における耕地の細分化は、ヨーロッパ中世でも同様みられるもので、ここでは時代が降る程 Hufe が分割され、耕地の狭少なものであらわれている。かかる一般的な傾向に抵抗するのが伝統の固執性であ

り、更に1歩を進めて所領の一円化は細分化と逆の方向に導くものである。ここでは前者についてみるため、前述の若狭中手西郷里の耕地を、大きさに関係なく、段以下の端数により統計すれば次の如くである。これによれ

段以下の 端数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
筆数	239	1	2	48	4	1	53	2	2	16	93	6	1		
段以下の 端数	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
筆数	4	4	99	1	36	11	6	58	9	5	12	5	3		

ば、段単位のものおよび小・半・60歩・大等条里と関係あるものが圧倒的に多く、300・100・200等新しい大きさの単位と何らかの関連がある如きもの、これに次いでいる。だがここでは古い形状の固執傾向は強い。

上にみた中世の細分化傾向は、中世末若しくは近世初期の文書からも確めうる。例えば大和国齊音寺村(現奈良市)の文禄4年検地帳によれば、1区劃半段前後の水田が最も多く、この附近の平安時代の家地売券と比較して、細分化がかなり進んでいることが知られる⁵⁹⁾。また山城盆地の如く開拓の古い所にも同様な傾向を示し、例えば天正12年の山城久世郡狭山検地帳によれば⁶⁰⁾、1筆当たり平均水田4畝02歩、畑地6畝02歩となり、筆数では1畝(水田)、6畝(畑地)のものが最も多い。(第3図I, II)これを大きさに関係なく、田畑とも端数が漸以下のものを示せば次表の如くであって、若狭の場合と比

畝以下の 端数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
筆数	546	3	10	12	17	27	19	7	10	5	139	2	16	10	11
畝以下の 端数	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
筆数	58	9	2	14	5	171	8	7	4	22	19	18	11	24	0

較して、土地測量が飛躍的に正確となったためにもよるが、耕地の形状のパラティが一層大となっている。

近世以降の耕地細分化の傾向については、既に内田寛一氏の研究⁶¹⁾がみられるので、ここではこの様な一般的な傾向とは異った場合につき若干触れてみたい。上述の狭山検地帳と現在の同部落の土地台帳とを比較すれば、第3図の如くである。現在の水田1筆当たり平均面積は5畝7歩で、土地大量単位の変化を考慮に入れても天正当時よりかえって大きくなっており、且つ筆数も1反区劃が最大である。その理由は明らかでないが、この部落が

第3図 近世以降の耕地1区劃の大きさ
(山城国久世郡佐山村宇佐山)

I水田 天正12年(1584)検地帳による

II畑地 同上

III水田 1949年現在、土地台帳による

IV畑地 同上

a1反~1.09反 区劃 471筆

b1.1反~1.19反区劃 336筆

但し現在の土地台帳は全体の約1/3,その他は調査不能

木津川堤防の完成と低湿地の干拓により、耕地面積を急増せしめたことと関係あるものとみられる。近世以降の低地開田の結果、かくて安定した米作農村となりえたわけである。大正末期にこの平地の村落をおそった激しい小作争議も、村民の称する程耕地細分化を結果しなかったのは、一たん確立した形状の強い伝統の力によるものであろう⁶²⁾。

以上にみた耕地の細分化とその所有の錯雑化とは、当然何らかの対策を必要とする。耕地整理が即ちそれである。整地が近代日本で初めて行われたのは明治20年で⁶³⁾、同32年には耕地整理法が制定され、爾後全国に普及していった。昭和15年における全国の施行状況を調べると、畿内を中心として中国から中部地方にかけてと、奥羽北部より北海道にかけてとの2地域は整地率が小である。その理由は前者が条里制の影響強く且それが進んだ水田経営を許するため、後者が新開地のため、共に耕地整理の必要が少いからであらう⁶⁴⁾。だが小地域についてみれば、細分化と伝統の固執との両傾向は対立しており、その限り、耕地整理は常に古く且新しい問題たるを失わない。なお土地所有に関し、集落の位置およびそれへの距離と耕地の形状との関連をみる必要があるが、これは他日を期したい。

む す び

以上、農業地理・集落地理の2つの側面より耕地の形状を考察し、前者では現在みる耕地の形状の歴史性が強

調され、後者では米作社会としての日本農村の特色が明らかにされた。その特色たる耕地-村落のゆるい対応は、灌漑を必要とする米作とその社会の歴史的発展の緩慢さに関連づけられ、かくて2つの問題は1つとなって、現実の面に直面する。耕地の形状という瑣細なことから現実の問題の歴史地理的分析が試みられたが、その道は峻しく且遠い。大方の御叱正を乞う次第である。

文 献 お よ び 註

- 1) Demangeon A; *Économie Agricole et Peuplement Rural*, Ann. de Géogr. 43 Année No.241 1934
- 2) 辻村太郎; 景観地理学講話 第二章 昭和12年
- 3) 村田貞蔵; 番地界の形態及び番地界図に依る新旧道路の識別 地理学評論8の8 昭和7年
- 4) 東畑精一; 日本農業の展開過程10~11頁 昭和11年 所引による。
- 5) 例えば笠置高原の柳生村では、農家一戸当り経営面積が水田4.72段、畑地1.77段で、平和村にかなり劣るが、総戸数に対する農家戸数は共に90%を超える純農村である。ここでは製茶等の畑作収入が米作収入の不足を補っているにせよ、水田経営への強度の執着が、村落生活の向上に抑制的に働いているのではないかとまで考えられるのである。
- 6) 例えば平和村では農家一戸当り畑地経営面積が僅か0.01畝であり、治道村でも0.6畝に過ぎない。
- 7) 例えば白銀村の農家一戸当り経営面積は、水田1.5段に対し畑地4.3段であり、川上村では0.005段に対して0.58段と更に零細になる。従つてかかる所では農業以外の産業に従事するものが多くなり、例えば添上郡の農家戸数が総戸数の79%に対し、吉野郡のそれは72%となつている。
- 8) 1950年版日本農業年鑑(p.84)には、①傾斜地帯は小さく、平坦地帯は大きい。②新開地は大きく、古く開けたところは小さい。③耕地整理の済んだ地帯は平均的な大きさであるが、未整理地帯は大きさが区々である。④富裕農は大きい区劃の農地を持つが、貧農は小さい区劃が多い。など四つの傾向をあげている。
- 9) 米倉二郎氏が(農村計画としての条里制 地理論叢1 昭和7年)現在の農民の耕耘能力より類推し、且はローマのユゲルム、中欧のモルゲンと比較して、かかる見解を披瀝されたことは周知の所である。
- 10) 沢田吾一; 奈良朝時代民政経済の数的研究 p.528 昭和2年
- 11) 吉岡金市; 日本農業と労働力 p.8~9 昭和17

- 年 による。但し先進的な岡山県で約 10 人、後進的な岩手県で 29.2 人。
- 12) 古事類苑 産業部 1 p. 49
 - 13) 例えば East G.; An Historical Geography of Europe 3d. Ed. pp103~105 1948
 - 14) 農業土木学に関する資料は牧隆泰; 新編農業土木学 pp. 92~103 昭和 17 年による。
 - 15) この点について筆者はかつて地域の先進・後進の問題に形を変えて若干論及した(昭和 26 年春季日本地理学会大会)。従つて牛馬耕出現の時期及び波及の如何が重要な問題となつてくる。
 - 16) 古いものは区々で、例えば大正 3 年に整地を行つた手取川扇状地の野々市町での筆者の実測によれば、25間×10間、24間×10間、23間×10間の3種類が支配的であつた。
 - 17) 応長元年・伊予弓削島庄田畠山林塩浜以下相分帳(東寺百合文書と 111)
 - 18) 文永 2 年・若狭中手西郷里田内検帳案(同上 1)
 - 19) 応安 4 年・丹波大山莊田数拜年貢名寄帳(同上 19)
 - 20) 東寺百合文書 は 161, と 144 等
 - 21) 同上 と 10, と 126
 - 22) 同上 に 166 (永享 9 年)
 - 23) 平安遺文 巻 2, 591 号 その他
 - 24) 横山由清; 日本田制史 p. 74 「棚田膳田ともいう、山傍とも下りの所をいう」
 - 25) 続地方落穂集 巻 5
 - 26) Anfrère L.; Les Rideaux, Étude Topographique, Ann. de Géogr. 39 Année 1929
 - 27) 能登志雄・吉崎恵次; 本邦における階段耕作の地理学的研究 地理学評論 12 の 4, 9 14 の 3
 - 28) 拙稿; 歴史的村落の慣性——播磨国鶴庄内四村落——立命館文学 79 号 昭和 26 年
 - 29) 成形成説 巻二 農事部
 - 30) 書紀成務天皇 5 年の「阡陌に随いて、以つて邑里を定む」その他。
 - 31) 天曆 7 年 2 月 11 日の伊勢国長谷寺資財帳(近長谷寺文書, 平安遺文巻 1 260 号) など。
 - 32) 更に長方形の耕地では、南北を長邊とし、東西を短邊とするのが、作物と日照との関係から好都合と考えられるが、大和盆地の春日断層崖下で実測した所、傾斜のより大きい複合扇状地では長邊が南北方向をとっているが、平坦な低地ではその方向が一定していなかつた。これは日照よりも傾斜や灌漑の如何が主要な規定因子となつているためであらう。
 - 33) 「政事要略 53」 国史大系 12 巻 p. 639 類象三代格巻 8 中庭に稻を積んで秋の長雨にあつて困窮している百姓に向つて、大和で発明された稻機の使用を奨励している。
 - 34) 「一区の内にて水口の方を畦という溝澮高く田に注落す所なれば、淤泥あつまり動もすれば田面隆くなりやすし、一方窪なれば一方へおのつから掘なることなり、一区の内にて地面隆夷あれば水の浸す所均しからず……」(成形成説 巻 2 農事部)
 - 35) Schlüter O.; Deutsches Siedlungswesen, J. Hoops: Reallexikon der Germanischen Altertumskunde, Vol I s. 433 1911
 - 36) Steinbach F.; Studien zur Westdeutschen Stammes- und Volksgeschichte s. 113 Jena 1926
 - 37) Martiny R.; Hof und Dorf in Altwestfalen, Das Westfälische Streusiedlungsproblem Leipzig 1926
増田四郎; 中世初期ザクセンの等族制について, 史学雑誌 6 の 11 昭和 23 年による。
 - 38) Charaud Anne-Marie; Bocage et Plaine dans L'Ouest de la France, Ann. de Géogr. 53 Année No 310 pp. 113~125 1949
 - 39) 例えば Gradmann R.; Vorgeschichtliche Landschaft und Besiedlung, Geogr. Zeit. 42 s. 378~268 1936
 - 40) Below G. von; Geschichte der Deutschen Landwirtschaft des Mittelalters, hrsg. v. F. Lütge, Jena 1937
堀米庸三訳; 独逸中世農業史 p. 74
 - 41) Wilhelmy H.; Völkische und Koloniale Siedlungsformen der Slaven, Ein Beitrag zum Einzelhof-, Haufendorf- und Rundlingsproblem, Geogr. zeit. 42 1933
 - 42) Gradmann R.; Die Ländlichen Siedlungsformen Württembergs, Petermann Mit. 56 s. 183~186, 246~249 1910
 - 43) 拙稿; ミディにおける二圃農業 立命館大学地理学研究小報 4 昭和 27 年
 - 44) 前述の大和盆地の一部落(磯城郡川東村字爲川)に例をとって、耕地一筆の面積を調査すると下記の如くで、特に水田については 1.2 段(条里の 1 段)及びその $\frac{1}{2}$ の大きさのものが特に多くて二つの山をなし、条里制が今猶大きい力をもっていることがわかる。

一筆ノ	1畝	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
大キサ	以下	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
水 田	1筆	3	1	3	2	⑧	7	6	6	7	8	⑨	8	5	3	4
畑 地	1筆	9	8	11	9	8	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0

- 45) 拙稿；古代村落における条里制の諸問題 立命館大学創立五十週年記念論文集 昭和26年
- 46) 石田龍次郎；散村とその耕地——となみ覚書——橋論叢 22の6 昭和24年
- 47) 拙稿；日本における散居集落の特質——第一報——立命館文学 70~72号 昭和24年
- 48) 田貞次；讃岐における散居村落の研究 高松高商開校十週年記念論文集 昭和9年
- 49) 延喜22年4月5日「和泉国大鳥神社流記帳」（平安遺文 卷1, 218号）にみる「富視里12坪2段大」などが卓見の限り、最も早いものに属しているようである。
- 50) 清水正健篇 莊園志料 所引による。
- 51) 「伊予弓削庄検田目録」（東寺百合文書 と2）
- 52) 「伊予弓削庄桑検注目録」（文治5年 同上 と3）によれば桑 373本
- 53) 「伊予弓削島莊領家地頭和与状案」（同上 に6），「伊予弓削島庄親掌法橋梁実起請文」（同上 と92），「伊予弓削島庄家地頭相分差図」（同上 と93）これによると島内は三分され、その $\frac{2}{3}$ は領家に残され、 $\frac{1}{3}$ は地頭代の一円支配を受く。
- 54) 「伊予弓削島庄田畠山林塩浜以下相分帳」（同上 と112）
- 55) 拙稿；歴史的村落の慣性 前掲
- 53) 例えば承和2年4月「民部省符寫」（八代恒治氏所藏文書，平安遺文卷1, 58号）その他
- 57) 東寺百合文書に166「丹波大山莊内検帳」。これを

応安4年のものと比較すれば、1段以下の小さい区劃が9筆より17筆に増加し、2段以上の大きい区劃は19筆より僅か2筆に減少している。

- 58) 西岡虎之助；中世後期における相模柳川郷の経済的相貌，東亜社会研究1, p. 161 昭和18年
- 59) 検地帳は奈良市尼ヶ辻町総代保管。それによると一筆当り平均上田（全水田の65%）4畝21歩，中田6畝2歩，下田15歩，上畠（全畑地の63%）3畝5歩，中畠1畝28歩，下畠7歩となつて，今日の大和盆地のものと傾向が似ている。
- 60) 石清水文書卷三（大日本古文書）。この検地帳によれば，水田20町5段9畝13歩，畑地47町8段7畝01歩，田畠4段5畝，屋敷1町8反8畝16歩，戸数77戸と推定される。そのうち地主的なもの7，8戸で他村よりの入作が多い。
- 61) 内田寛一；耕地の区劃細分の傾向について 大塚地理学会論文集3, 昭和9年
- 62) 現在の佐山部落は米作農家142戸，耕地227町（天正の約3倍）。農地解放前は在村地主16戸の所有地47町，不在地主43戸の所有地111町で小作人の平均経営面積は9反である。他村への出作が多い。
- 小作争議にこりた地主はできるだけ小耕地に分割して小作せしめたというが，実際にその数は多くない。
- 63) 鈴木泰次編「耕地整理の沿革」石川県石川郡上安原村では明治20年に始めて整地が行われ，それによつて整理前2901筆で60町1段8畝12歩であつたものが，整理後1572筆62町8段7畝1歩と減筆増反された。
- 64) 但し中部山岳地方の場合は山地地形の制約のためであらう。